

依田学海と『聊齋志異』

—『小野篁』と「蓮花公主」—との比較研究を中心に—

楊 爽

一、はじめに

魯迅は『中国小説史略』で、『聊齋志異』のことを、「描写が委曲を尽くし、叙述は整然としていて、伝奇の方法で怪を記し、変幻のさまが手に取るように分かる。またあるものはまったく調子を改め、別に奇人の奇行を述べ、幻想の領域から出て、急に人間世界に入る。たまに瑣聞を記しても多くは簡潔である。だから読者の耳目はそのために一新される。」¹⁾と評価している。さらに、その特色として、「詳細を尽くしているだけでなく、ふだんのありさまを書いて、花の妖精でも狐の魑魅でも、多くが人情を持っていて、穏やかで親しみやすく、それが異類であることを忘れてしまふ。」と述べ、明末の志怪小説と区別している。山口剛も『聊齋志異』のことを「清朝奇談集中の尤であると共に、また支那奇談集中の傑れたるものである。」と評価し、その文辞の巧妙さを賞賛している。²⁾それらの意見に異論はないが、中国の小説史において、清の時代が文言小説より白話小説が主流であった時代であるにもかかわらず、蒲松齡があえてこの時代の流れに乗らず、文言を取って中国の怪異文学の集大成と言われる『聊齋志異』を作りあげたことも注目されることであろう。落第書生であった蒲松齡はこの作品を通じて、様々な異界の物語を語ると同時に、「時代性、社会性を加味して」³⁾、実世界に対する批判をし、鬼狐に託して自らの志を述べている。『聊齋志異』現存最古の刊本は、乾隆三十一年（一七七六）の青柯亭刻本（十六卷）で

あり、この作品が初めて日本に渡来したのは、記録による限りでは、明和五年（一七六八）のことである。^④

このような怪異譚を内容とする小説の日本伝来は『聊齋志異』だけではない。明の瞿佑が著した文語体の怪異小説集である『剪燈新話』は、「異常なすじ書きと異国情緒が太平になれた島国の民にスリルを感じさせたのか、数多くの翻案ものを生んだ^⑤」と魚返善雄がいうように、その伝来は、江戸時代の日本で、怪談の流行をもたらした。浅井了意の『伽婢子』と上田秋成の『雨月物語』は受容の例として、常に取り上げられている。一方、『聊齋志異』は、『剪燈新話』よりもはるかにストーリーが複雑に描写が細やかになっていて、すでに発達していた白話小説のストーリーと描写にも匹敵できるほどの短編小説集^⑥であるが、文章が難解であるためか、当初は、一部の漢学者に限って愛読されていた^⑦。けれども、量は少ないものの、翻案作もいくつか出ている。たとえば、一七九二年には、森島中良が『聊齋志異』から五篇の作品を翻案し、『風草紙』として刊行している。五年後の一七九七年には、曲亭馬琴の『聊齋志異』翻案作である『押絵鳥痴漢高名』が刊行された^⑧。明治期になると、漢文は知識人の基礎教養として認識されるようになり、新聞紙上の漢詩欄の設置などうかがえるように、漢文学は一つのピークを成し、知識人の漢文に関するリテラシーも江戸時代より高くなってきた。さらに、出版技術の発展に伴って、『聊齋志異』は多くの読者を獲得して、新世代の文学者の中でも愛好されるようになってきた。それ以降、翻案、翻訳が多くなされ、日本の文芸創作に大きな影響を与えた^⑨。

以上は『聊齋志異』の先行研究の諸成果を踏まえ、その作品の様相及び日本への伝来の歴史と受容についてまとめたものである。本稿では、明治二三年に発表された「小野篁」という作品を取り上げて考察する。この作品は明治二三年二月に、漢文学者・劇作家としてよく知られる依田学海が『新著百種』第八号に発表した短編小説である。この作品と『聊齋志異』との関連性については、森鷗外の言及があるものの、今日ではほとんど顧みられないことがない。そのため、本稿では、「小野篁」を『聊齋志異』の原典と比較しながら、小説については和漢洋の教養を自負する依田学海が「小野篁」を作る時、どのような創意工夫をしたのかを確かめる。さらに言文一致体に向かい発展しつつあった日本近代文学の成立期に、この文語

体作品が持ちえた歴史的意義も検討したいと考える。

二、「小野篁」と『聊齋志異』との対訳

一八八九年九月一日に、吉岡書籍店創業の吉岡哲太郎は依田学海を訪ねて、『新著百種』のための文章を依頼した^①。同年十二月十五日、「小野篁」が完成し^②、翌年の二月、『新著百種』第八号に発表された。その後、この作品が発表された間もなく、森鷗外は一八九〇年二月二十七日に『読売新聞』で次の文章を発表して、『聊齋志異』との関連性を指摘した。

聊齋志異の翻訳は此頃ちらほらと世に出づるなかに或は文章の観るべきもありて翻訳と断りたる限りは随分面白きことなるが既に三味道人の仙人巖掘鑿といふものなりて都の花に出でたるもおかしからず思ひしに又々新著百種にて（善く聞き玉へ）——新著百種にて依田百川先生の小野篁といふは例の聊齋志異なり小野篁といふ名字がつきしのみにて趣向は毫釐も差はず桂府蓮花の一聯さへ其儘に出でたり文章は頗典雅なれど新著百種の面目にはいかゞにやと者は積汚然と申すものなり^③。

この作品を『聊齋志異』と関連して論じたのは、管見の限り、森鷗外のこの発言が最初である。学海の「小野篁」は『聊齋志異』の「蓮花公主」と趣向が一致しており、桂府蓮花の対聯のような細部までそのままであるので、文章は典雅であるが、「新著」とは言えないと森鷗外は認識していた。そして、「小野篁」は三味道人の「仙人巖掘鑿」と同じように、『聊齋志異』の翻訳作でありながら、あらかじめ読者に断わっていないと言う点には、鷗外の批判の意が含まれているのである。

のちに、森鷗外は『月草』（春陽堂 一八九六年十二月）で「小野篁に就きて」に改題してこの評論を改めて発表した。¹⁴ 原文は以下の通りである。

聊齋志異など訳せむこと、文章めでたくば、頗興あるべし。されどかかる著にはその翻訳なるをことわるかた宜からむ。三味道人はさきに都の花に仙人巖掘鑿といふものを出ししを見しが、今又此訳あり。趣向は原作のままにて、桂府蓮花の一聯さへあり。其文は頗高雅なれど新著百種といふものの趣意には適へりやあらずや。¹⁵

この論説では表現が婉曲的になっているが、「小野篁」が「蓮花公主」の翻訳作であるという指摘は前掲引用と変わらな
い。

さて、「小野篁」という作品はどのような物語構成をしていたのか。その梗概を箇条書きの型でまとめれば、次のよう
なる。

- ① 秋のある日、小野篁が家に白楽天の詩を詠唱していた。昼寝をしようとする時、褐色の仮衣を着ている人が現れ、小野篁を連れて幾町かを通り抜けていき、大厦高樓の別世界に案内する。
- ② 往来している者はみんな褐色仮衣の人に小野篁の到来を確認する。出迎える人が出て来て、小野篁と挨拶した。その後、五衣に緋袴を着ていた人が檜扇をかざして現れ、小野篁を君王のところに連れていった。
- ③ 君王とあった小野篁は、「桂府」への招待を受けた。宴会のさなか、君王が「才人登桂府」の対句を求め、小野篁が「君子愛蓮花」の一聯を提示する。その最中、蓮花公主が姿を現す。
- ④ 蓮花の美貌にひかれた小野篁は、君王が縁組を暗示したのに気づかぬまま家に帰り着いた。悔しい気持ちを抱え、幾日を過ごした。

⑤ ある夜、学生と枕を並べて寝ていると、その褐色の仮衣を着ている人がまた現れ、小野篁を再び桂府に連れて行った。そこで、小野篁と蓮花公主とは縁を結んだ。

⑥ 蓮花公主と新婚の夜を過ごした翌朝、宮殿が妖蟒に襲われ廃墟となった。君王の望みに応じて、小野篁は蓮花公主を自分の家に連れ帰った。公主は父母や、宮殿の人々みんなを連れてくると述べたが、小野篁は断った。公主を慰めな
いまま目を覚ましたら、耳元に蜂の鳴き音がする。怪しいと思って、共にいる学生と話していると、蜂の姿も目にした。¹⁶

⑦ 学生の話に応じて、蜂のために巣を作っていると、群れの蜂が垣の外より集まってきた。蜂たちがやってくる方を尋ねると、隣の翁の畑に古い蜂の巣があることがわかった。

⑧ 巣を取って、壁を毀すと、中に長い蛇がいた。そこで、蛇を殺して捨てた。

森鷗外の言うように、作品の中には桂府蓮花の挿話も出てくる。「小野篁」が「蓮花公主」を典故に仰いだことは確かであるが、翻訳・翻案としての性格、並びに独自性について検討する必要もあろう。

「小野篁」と同時代に、森鷗外の妹である小金井きみ子は『聊齋志異』の「画皮」を翻訳し、「皮一重」と題にして発表している。この作品が依田学海の影響を受けていることは後にまた触れるが、ここでは、その先行研究を紹介しながら、「皮一重」の作品の様相を把握してみたい。

藤田祐賢は、『皮一重』も（『浴泉記』と）同じような美しい擬古文風のスタイルで訳出されている。ただきみ子の訳は原文に忠実な訳ではなく、かなり潤色を施したものである。（中略）このような訳の『皮一重』が、志異の物語として世間の眼に触れた最初のものであった。（中略）この二つの物語の妻に共通した、夫を思う強い愛情の美しさに、きみ子は心をひかれたのではなからうか。」と述べていた。後に、きみ子の「皮一重」を翻訳ではなく、翻案と改めて認識している。また、前掲引用の鷗外の発言で言及のある、宮崎三昧の「仙人巖掘鑿」と依田学海の「小野篁」にも触れて、翻案ととらえて

いる。¹⁷

翁蘇倩卿は、「小金井きみ子女史翻訳の「皮一重」も雅文調の文語体で、王朝時代の背景に写しかえられたため、妖怪変化の物凄さも、また道士が法術をつくして獯鬼を制伏するあたりの不可思議も、ローマン的な王朝文学調では原文の迫真力がそがれてしまう結果を招いた。このまだるっこい手法は、なにか時代錯誤的な舞台劇を観ているような感じを読者に与えるだけである。」¹⁸とした。後に、小田桐弘子は、「皮一重」と「画皮」とを対訳の形で掲げ、原作に対する潤色・加工を詳細に検討した。分析を通じて、小田桐は両作品の異なりを明らかにしながら、「皮一重」を「一層濃厚に、典型的な、夫を想う妻の愛の物語として再構成している」¹⁹作品と述べ、藤田祐賢の意見を追認している。また、翁蘇倩卿が指摘した翻訳の限界も比較検討を通じて明示している。

本稿も、小田桐弘子の方法に倣い、「小野篁」と『聊齋志異』との二つの作品を対訳の型で掲げ、詳しく比較検討することで「小野篁」の特質を探りたいと思う。同時に分析によって、「皮一重」と「小野篁」との類似性にも迫りたい。

まずは、依田学海が読んだ『聊齋志異』の版本を特定しなければならぬ。依田学海の日記である『学海日録』と『墨別墅雑録』を参照すると、明治一六年七月一八日の日記に、「評本聊齋志異十六巻を得たり。但雲湖の評にかかる道光二十二年の序あり」²⁰という記載がある。学海の日記における『聊齋志異』関係記録はこれが最初である。さらに、南葵文庫所蔵学海遺書を調べたところ、学海所蔵の『聊齋志異』は道光二十二年刊行された呂湛恩の註釋、及び但明倫の新評が付いている『聊齋志異新評』であることが分かった。南葵文庫所蔵『聊齋志異新評』の中には、傍点、句読点が加えられ、難解語彙の解説も書かれており、依田学海の精読ぶりがわかる。細部まで検討するため、「小野篁」と「蓮花公主」の原文を対訳の形で【資料】として掲げておいた。ご参照いただければ幸いです。ただし、学海の受容の仕方により、完全な対訳になっていないことを断っておく。「蓮花公主」の本文は、南葵文庫の依田学海蔵本『聊齋志異新評』による。また、「小野篁」は一八九〇年の二月に発刊された『新著百種』第八号の本文を底本にしている。

三、「小野篁」と「蓮花公主」との比較

両作品を読み合わせると、主人公の名前は変わっているものの、ストーリー面では、ほとんど一致していることが明らかである。しかし、細部に関しては、依田学海の独自の創意が窺える。以下具体的に分析していく。

先述の魯迅の『中国小説史略』が示しているように、『聊齋志異』は「たまたに瑣聞を記しても多くは簡潔である」。表現の簡潔さは『聊齋志異』の特色としてよく取り上げられる。その叙事法は、小田桐弘子が指摘したように、通常「どのだれが何をする」という形をとって、わずかな文字数で、物語の最初に主人公の紹介を行う。「蓮花公主」もその形を取っている。て、(1)「膠州竇旭 字曉暉 方晝寢 見一褐衣人立榻前」(膠州の竇旭は、字を曉暉とする。昼寝をしようとする時、榻の前に、褐衣着の人が現れた)というふうに始まっている。一方、学海の作品の題名である小野篁は、平安前期の官人・学者・歌人であり、博学で詩文に長じ、天才と言われていた。そして、嵯峨天皇が小野篁の詩才を試みたところ、小野篁が白楽天と同じような詩文を作ったという逸話は古くから流伝してきた。⁽²⁾そのため、学海の作品では、『聊齋志異』の叙事法を受けながら、「小野篁」の「英才」があることを合わせて表現するために、小野篁に関する説話を巧妙に活かして、白楽天の詩などを吟味する優雅な文人の姿として描き出している。

さらに、原作には、季節に関する情報は一切ないが、学海の「訳文」には、B「折しも秋の半にて。紅葉の庭に散りたるも。流石に見ところ無にあらす。」という表現がある。秋の季語としてよく使われている紅葉も登場させ、詩の吟味の傍ら、紅葉を味わっている風流な主人公を彷彿とさせる。いかにも趣ある表現であろう。こういう季節を特定する傾向は、小金井きみ子の「皮一重」にもあり、両作とも秋になっていることに留意したい。

A「いまた官道に進まさりし頃」の一句は、一見無用に見えるが、実は後段の伏線として重要な設定である。まだ若い書生だからこそ、好奇心旺盛で、浅はかな言動を取ったり、一目ぼれしたりすることにも違和感がない。これは主人公の入れ

変えたことに不自然さを感じさせないための工夫であると言える。

(2) 「逡巡惶顧 似欲有言 生問之」の部分について、学海はC「お事はいかなる人におはす」という内容を添え、原作にない主人公の疑問を対話で具体的にあらわしている。そして、続く部分で、学海は「謹て答ふる」と敬語を用い、相手の小野篁に対する尊敬ぶりを表している。この小さな加筆によって、褐色着の人物の礼儀正しさを表し、君主の使者である身分にふさわしい人物像を作り上げている。

学海は原作にある(3)「相公何人曰 近在鄰境」の対話部分を削除し、代りにD「篁もとより奇を好めは」というふうの小野篁の内面を叙述している。そして、好奇心によって、異議なく使者に従う小野篁が見た大夏高樓について、学海は「見るほとに。常には見えぬ」と潤色し、異世界のできごとという先の展開を暗示している。

(4) 「又見宮人女官 往來甚夥」の部分について、学海は訳文で、「衣冠」、「衣装」まで丁寧に描写して、原作より、異世界を詳細に描き、その場の雰囲気を一層醸し出している。E「見るほとに。常には見えぬ大夏高樓あり」、F「此世のうちそとは見えぬはかりなりき」の後に、G「何とも得しらぬいと麗はしき衣装を着たるものあり」が続き、傍線部分の「何とも得しらぬ」の表現を通じて、不思議さに打たれる篁の心情を表現した上で、読者の好奇心をさらに高めている。

(5) 「生益駭問 王何人」の簡潔さに比べて、学海の表現は、篁の驚きぶりを表現するため、H「君王としもの玉ふは。いかなる君に在します。吾大君の外には。さる人あらしと思ひしに。」という創作的な対話部分を加え、一層効果をあげている。

(6) 「以雙旌導生行」の「雙旌」は、「旗」のことであるが、学海作では、「檜扇」となっている。さらに、原作の「女官」以外に、I「五衣に緋袴着たる」人も登場させ、物語の舞台を王朝風にしている。続く、(7)「見殿上一王者 見生人降階而迎 執賓主禮 禮已踐席 列筵豐盛」に対応する部分は、なかなか興味深い。まずは王の衣装に関する描写である。王様はJ「龍鳳の袍を召して。珠玉の冠を戴きたる」者で、明らかに中国古代皇帝の姿である。学海作にある王のK「貴客よくこそ

問はせ給ひたれ。かねて才學聲望は世に隠れ無きをもて寡人窃に景慕に堪へず。斯る陋境なれば。もてなし奉る者なければと聊一杯の水酒を召され候へ」というあいさつも原作にはないが、中国皇帝の姿をしている人物にふさわしい話し方をしているので、この創作的な漢文調の表現にもほとんど違和感がない。ここには、学海の漢文素養の深さがあらわれている。同時に、平安朝の舞台における現実世界と区別できる異世界の表現になりえている。

(8) 「列筵豊盛」の一句に対しては、学海は自由訳の姿勢を取っている。原作は極めて短くて、簡潔なものであるのに対して、学海訳は宴会場の状況、並びに篁の「その味えも言はれず」という心情まで細かく描き出している。この潤色は、作品の最初にある好奇心旺盛という人物設定と対応している。

(9) 「仰視上一扁曰桂府」については、学海は、M「しはらくし首を擧て殿上の扁額をみるに。雲篆をもて。桂府の二字を記したり。」と訳して、道教の仙界符圖である「雲篆」²²を用い、王が人間ではないことを示している。ここから、学海が中国古典に精通していることがうかがえる。

続く(10)「酒數行 笙歌作於下 鉦鼓不鳴 音聲幽細」の部分については、原作では、「寫笙歌亦雅切蜂」という但雲湖の評があるように、伏線の意味を持っている。²³学海作は但雲湖の評を略しているが、N「唯絲竹の響のみ」と強調することで、続く蜂の登場を暗示している。そして、続く部分では、O「こは珍しき音楽なるかな。と思とも。問ひ奉らんもさすかにて。暫く耳を傾けて聴居たり。」というふうに、篁の様子も記述されている。これは、原作より細かな描写といえるであろう。学海が言葉を惜しまずに篁の内面を細かく表現していることは、原文と異なる一つの特色といえる。

(11) 「移時佩環聲近 蘭麝香濃 則公主至矣」のあたりまでは直訳的であり、忠実に原作の内容を伝えている。次にある(12)「年十六七 妙好無雙」の部分では、学海は言葉を尽くして公主の美しさを描き、篁の目を借りて、読者を楽しませる。P「眉の韵は新月の雲間を出るに異ならず。」のように、中国の古典に詳しい学海は古代詩人が詩歌で詠んでいた理想的な美人を登場させている。²⁴このように工夫を凝らして、具体的な人物像を描いている点は、原作の簡潔さに比べて情調豊かと言

え、主人公の心理に対する関心の現われとも評価できる。そして、「眼を斜にしてこれを見る」という加筆は若い小野篁の人物像を生き生きと表現するものである。このような主人公の個人的心情への関心は学海作の優れたところであろう。

主人公と王様との別れの部分は、学海訳ではかなり省略されている。そのかわり、Q「夕日の影は庭の木の間に漏れて紅の光をと、め寒鴉の聲は落葉の音にまじりて林のあなたに聞ゆ」と情景描写を加え、篁の名残惜しい気持ちを際立たせている。創作された文には一層風韻があつて、具体的に篁の寂しさが巧みに表されている。

続いて学海は、寝台をともしして寝る人を原作の(13)「友人」からR「親しき學生」に変える工夫をしている。これも名高い才子であるという篁の人物設定に合わせるための入れ替えであろう。

宴席場面は、学海作のほうが周りの人の服装まで描いており、より盛大で、にぎやかな印象を与える。ただし、婚礼の場面では、学海作はいくつかの描写を省略している。これは日中の風俗の相違からの措置であろうが、(14)「窮極芳賦」も訳していないのはなぜだろうか。原作には、「窮極芳賦」のところに、但雲湖の「確是蜂房」(確かに蜂房である)という評があつて、この一句の伏線の役割を強調している。しかし、学海はその伏線を省略して、「洞房」の状況描写のかわりに、S「然る程に篁は思いも懸けず国王の婿となるのみか、世にも希なる美人を娶りてその喜は大方ならず。洞房暖かに芳ばしく、世は秋ながら春霞引きわたしたる天上の娯楽も此上あらじと思いたる。」と記しているように、篁の内面描写に重きを置いた。雅やかな言葉づかいを用いた加筆によって、若い主人公の風流な人物像が形成されている。

(15)「詰且方起 戲為公主勻鉛黃」の訳文は、情景描写から始まり、原作より一層趣を添えている。そして、学海は漢文の素養をいかして、T「人は自ら己が妻の眉を描く」典故²⁵も用い、篁と蓮花公主との仲睦まじいところを表現した。

(16)「公主笑問 君顛耶」の「顛」という言葉は「狂う」という意味であるが、学海は直訳ではなく、U「御身は何の戯をし給ふ」というふうには、優雅な文辞で訳している。公主の身分にふさわしい高雅な言葉づかいで、公主と篁との愛情あふれる日常が十分に表されていると言える。

次の宮女が走ってきた場面の訳文は、原作より繊細に記述される一方、対話は圧縮されている。宮女の立場を考えれば、思いを一気にはつきりして口に出すのは無理であろう。学海の処置は場の緊張感をよく伝えている。さらに、原作にない公主の反応まで書き添え、臨場感を出している。

続く(17)「慚無金屋」の部分まで、学海は直訳する姿勢をとっている。そして、「慚無金屋」は「金屋の阿嬌」の典故⁽²⁶⁾を踏まえているため、なかなか訳が難しい部分である。学海が「金屋」を「玉楼大厦」と訳しているのは、ニュアンスは違っているが、「大きな家がない」という原文の意味を伝えており、妥当な選択と言える。

結末の部分について、原作は、(18)「發其壁 則蛇據其中 長丈許 捉而殺之 乃知巨蟒即此物也 蜂入生家 滋息更盛」となっており、叙事的で、因果応報の意味も含んでいる。それに対して、学海はV「かの姫君の御腰の細かりしも。またかの音楽のいと微かなりしも。」という部分を加えることで、「風韻ありて余情永く読者の感を惹く⁽²⁷⁾」ものとなっている。原作の枠から脱した優美で抒情的な情緒が溢れる締めくくりと言えよう。

以上分析してきたように、学海の「小野篁」は、ストーリーはほとんど『聊齋志異』の「蓮花公主」を踏襲しており、森鷗外が指摘した通り、「新著」というのは妥当ではない。ただし、主人公や舞台の変更がなされているので、藤田祐賢が『聊齋志異』在日本(追補與訂正)⁽²⁸⁾で指摘した通り、翻訳よりは翻案と考えたほうがいい。学海は原作に対して、加筆・削除・改変などの手入れをして、原作の記述的筆調より、小説的な要素を強めた。その翻案の特色は、およそ次のようにまとめられる。

第一に、「小野篁」は、難解な中国古代風俗や習慣に関する表現の一部を、それに近い日本のものに改変しながらも、なお直訳的な部分が相当の比重を占めている。この直訳の部分は、原作の面白さ(趣向)⁽²⁹⁾を忠実に再現していると同時に、漢文学の素養を備えている学海が中国の古典についても的確に理解していることを表している。

第二に、学海は、作品で、小野篁に関連する複数の資料を併用し、日中の伝統を巧みに折衷して独自性を出そうとしてい

た。『江談抄』、『今昔物語集』並びに『三国伝記』は、篁が炎魔宮の冥官であったとしている。篁が異界の人と接する「篁説話」は、古くからある。「小野篁」は「蓮花公主」の翻案作として、中国の怪異小説と日本の伝統とを折衷して、独自性を出そうとした作品である。実世界に対して、学海は篁のために、濃厚な「中国」の色彩を帯びている異世界を作った。「麗しい衣装」を着ている人が往来している「大厦高楼」、「雲篆」で書いた扁額、並びに「水陸の珍羞を置き列べ、金銀の器もてこれをすすむ」宴席などからは、容易に「西遊記」の天宮か竜宮かが想起されるであろう。幼年時代から中国文学・文化に親しみ、漢詩文を広く渉猟した学海にとって、作品中の異世界を中国の古典と関連させるのは自然な選択であったのはなからうか。

第三に、原作の記述的筆調に対して、学海は人物の会話を付け加えることなどによって、細緻な描写で登場人物の内面を提示し、小説的な要素を強めている。翻案でありながら、『聊齋志異』の原作から離れ、主人公が中国風の格好をしている君王と会う独自の物語として別の趣向を加えて再構成した作ともなっている。

『聊齋志異』が簡潔な古典中国語の文章であるのに対して、前述のように、学海は細緻な描写を行い、古典的な雅語を使って文章を作っている。学海は原作の架空の人物を日本の歴史上の人物に変え、舞台も日本に移した。さらに、風雅な主人公に合わせるために、情緒のある背景描写を添え、物語風で優美な作品にした。石橋忍月は、「其文章よりするも、其事実よりするも一個の通俗竹取物語を読むが如し」と指摘する³⁰。劇作者でもある学海の人物描写は性格、趣味まで具体的であり、ストーリーの展開もテンポがよく、劇のように場面ごとの変化が印象的である。原作を尊重しつつ、学海の翻案作は、情景や心理描写に留意したもので、独自の表現空間を作っている。芸術性の点でも、原作の叙事的な書き方にまっさら部分もある。日中の古典を新しい方法で書き変えた「小野篁」が、同時代において持ちえた意義については、次節で触れたい。

四、「小野篁」に対する時代評

前述のように、「小野篁」は「蓮花公主」の翻案でありながら、独自の芸術性を実現している。会話や内面描写などの加筆によって、叙事的な筆調から小説的な色彩の強い作品となっている。本作を評価したのは、先述の森鷗外の発言だけではない。『読売新聞』で拜見居士も「小野篁」について批評し、「皮一重」とともに、『聊齋志異』を受容したものと指摘していた。原文は次の通りである。

我評素より豪然として評と云ふにたらず唯幾回か読りて後何とか彼とか思ひ寄る節と記すのみ―極めて正直に云へば作者に動かされて我筆もつ手の動き其書に感ぜしめられて我心に感ずる節と書きあらはすのみ（中略）

学海先生の小野篁流石に我等の評と為す能はざるほどスキの無きもの文章自在敬服々々但し聊齋志異逸文ともなすべき談話是も近来珍らしく小金井女史の皮一重と共に読み去りてアツと云はせらるるものなり此次は槐安国の話し其次は蟻の熊野道中記などと簇々類似者が出来ては驚くなれど蓋し此篇は単に先生一流文字の巧と示されたるのみ読むもの亦単に先生の文章と見るべきのみ^①

ここで、拜見居士は「小野篁」の文章を賞賛しながら、「聊齋志異逸文ともなすべき」といい、両者の関係性を指摘していた。それと同時に、「単に先生一流文字の巧と示されたるのみ読むもの亦単に先生の文章と見るべきのみ」と言うように、文章に学海の創造性を認めていた。その点、拜見居士の発言は森鷗外と違っている。

翻案とは、小説、戯曲などについて、前人の作品の大筋をまね、細かい点を変えて作り直すことである。むしろ、外国文学を受容する際、忠実な翻訳だけでなく、地名人名を置き換えて筋をなぞる単純な翻案から、設定やストーリーを大胆に変

える翻案までさまざまなスタイルがありえた。³²⁾ 学海の「小野篁」は「蓮花公主」のおおよその筋、内容を借り、人情、風俗、地名、人名などにおいて改変を行なったもので、本稿では、本作を翻案と判断したい。しかし、拝見居士と森鷗外との指摘が同時になされていることを考えれば、明治二〇（一八九〇）年代の日本における評価は一定のものではなかったことがいかがえる。

坪内逍遙が『小説神髓』の「緒言」で明治二〇年代頃の日本文壇の状況を次のように述べている。

小説といひ稗史とだにいへば、いかなる拙劣き物語にても、いかなる鄙俚げなる情史にても、翻案にても、翻訳にても、翻刻にても、新著にても、玉石を問はず、優劣を選ばず、みなおなじさまにもてはやされ、世に行はるゝは妙ならずや。実に小説全盛の未曾有の時代といふべきなり。されば戯作者といはるゝ輩も極めて小少ならざれども、おほかたは皆翻案家にして、作者をもつて見るべきものはいまだ一人だもあらざるなり。³³⁾

逍遙によれば、明治二〇年頃は「小説」全盛の未曾有の時代で、翻案、翻訳、翻刻、新著の区別が問われず、善し悪しも判断されないまま大量の作品が世にあらわれる時代である。『浮雲』や『舞姫』が登場する前の時期に、逍遙が翻案の流行を指摘していることに留意したい。

前掲拝見居士の論説は聊斎志異の翻案の流行に触れ、坪内逍遙の見方を裏付けるものである。さらに、拝見居士は小金井きみ子の「皮一重」を始めとして学海の「小野篁」に類似する一連の作品を挙げている。

小金井きみ子は森鷗外の妹で、歌人としてよく知られている。その翻訳作品『浴泉記』が石橋忍月に激賞されているように、女流文学者・翻訳家としても評価されている。「皮一重」はきみ子が『聊斎志異』の「画皮」を翻訳した作品である。

この作品について、森鷗外が「重印蔭艸序」（一九一一年）³⁴⁾でこのように記している。

舊宮人。菊と水。皮一重。人肉。此四篇は支那の小話を譯せるなり。當時學海依田先生などの試み給へるを見て、きみ子が響を倣ひしにや。⁽³⁵⁾

学海の影響を受け、小金井きみ子が中国小説の翻訳をしたと鷗外が述べていることは証言として重要な意味を持つていよう。引用文にある四つの翻訳作品の中で、「皮一重」は唯一『聊齋志異』によるもので、依田学海の「小野篁」と同じ明治二三年に発表されている。しかも、両作品とも雅文調で書かれていて、季節を秋に設定し、内面描写や情景描写を多く書き加えている。直訳の部分もあるが、それぞれの工夫によって情緒豊かな作品となっている。ほぼ同時に発表された「皮一重」は「小野篁」に倣った可能性が大きいと考えられる。

「小野篁」について、森鷗外、拜見居士とも表現については賞讃したが、作品の性質を翻案・翻訳とするか、創作とするかでは意見を異にしていた。作品のとらえ方について、次の石橋忍月の批評は興味深い。

學海居士の筆に成れる小野篁も亦た新著百種第八號の附録として現出せり二十ページに足らざる短篇なれども小野篁の夢物語を惹て人事に及ぼし蜂の難を避けて他に移る事實を以って暗に其夢物語に照應せしめ言外に無窮雋永の寓意あるは兎に角、居士の妙腕なり、居士平常の弊は文字の冗長なるに在り、然るに本篇は驚くべき程簡潔にして且つ健全なるは讀者をして二度吃驚を起さしむべし、本篇は小説には非す一種のミテウス（奇話）なり、その文章よりするも、其事實よりするも一個の通俗竹取物語（若し斯くの如きもの世に在りとせば）を讀むが如し、結末「げに☒かの姫君の御腰の細かりしも、またかの音楽のいと微かなりしも」の文字を以って筆を絶たれしは風韻ありて餘情永く讀者の感を惹く（後略）⁽³⁶⁾

石橋忍月は「無窮雋永の寓意ある」、「簡潔」、「健全」、「風韻ありて餘情永く」などの言葉を用いてこの作品を激賞していた。学海自身は『学海日録』で、「小説『小野篁』なり」と規定したが、忍月が「小野篁」を『竹取物語』と並べて、「一種のミテウス（奇話）」と認識しているのが注目される。

小説は美術的文字たらざる可からず、「美」の約束を守らざるべからず、人間生活を写すを以つて目的となさざる可からず、人と運命との間を規定する天然な法則を出さざる可からず、動力と反動力とより来れる行為を写さざる可からず

これは忍月が明治二三年に発表した「報知異聞」の一節である。小説は芸術のジャンルに入るもので、「人間生活を写す」ことが目的である。「美術的文字」をもって、「人情」と「世態」をそのまま模写することが小説の要件であると忍月は認識している。さらに、優れた小説は次のような要素を備えるべきであると彼は述べていた。

好小説が之を吟咏咀嚼して微妙雋永の味ある所以は、必竟美術的の文字たるが故のみ、若し小説にして「美」の約束を守らずんば、人間生活を目的とせずんば、関係なき人事を附造して結構の眩爛を喜ぶとせば、是れ小文人のみ拙技のみ³⁸

石橋忍月はここで「芸術」と「世態」、「人情」との関係論じ、優れた小説とは「世態」のあり様を登場人物を通じて現出させうる、芸術性を備えたものであるということ唱えて、小説の目的は人事を描写することにあることを改めて強調している。「小説の元素材料は人に在り、小説の目的物は人に在り、小説の趣向は自然に人物の性より湧出せざるべからず」と述べられているように、石橋忍月の文学観の中心は人間に置かれている。以上を要約すれば、人物の周りにある出来事を通じて、芸術的な表現でその人物をありのままに表現することが小説であるということになろう。

坪内逍遙より徹底した近代的な小説論を主張した石橋忍月にとって、「小野篁」は簡潔で、健全ではあるが、「一種の通俗竹取物語」⁽³⁹⁾であり、小説としては認めがたかったのであろう。依田学海の古典素養を肯定する一方、「小野篁」は古典文学を通俗化したものであると忍月は厳しい評価を下している。そして、「若し斯くの如きもの世に在りとせば」の一句には、現代作品として疑問が残るといふ忍月の意識が現われている。

明治一八年に、坪内逍遙が『小説神髓』を発表し、単なる勸善懲惡の功利主義的な文学を否定して、ヨーロッパの写実主義を提唱することによって、小説は芸術の範疇に組み込まれるようになっていった。もともと小説という言葉は、中国において、文字通り小さな説、即ち取るに足りないつまらない議論を意味した。⁽⁴⁰⁾中国の「小説」概念から影響を受け、街談巷語のような、暇つぶしの娯楽としてとらえられていた「小説」は、近代に入り、坪内逍遙が『小説神髓』で唱えていた「人情」と「世態」をありのままに「模写」する⁽⁴¹⁾文学へと変わっていくのである。「小野篁」の発表された当時は、「言文一致」運動の推進により、文体における近代化も進展しつつあった。

過渡・変革の時代に発表された作品の評価が揺れるのは当然のことである。しかし、ジャンルのとらえ方は異なるものの、作品の構成、表現等の面においては優れているという認識では森鷗外、拝見居士並びに忍月は一致していた。⁽⁴²⁾「小野篁」は、翻案であるが、主人公の内面提示に関心を注いでいるところに、小説の近代化における過渡的な要素を見てもよいかもしれない。

五、おわりに

明治三二年二月二十三日、『東京日日新聞』は、「新著百種」の第一号について、次のような広告を掲げている。

一冊読切の新雑誌 第一号三月五日発行○春の屋主人序○紅葉山人著 近来発布の雑誌其数夥しと雖も一部中教種の小説又は論説を掲るが故に看官B号を繙くに当りてA号の前章を記憶する能はず金玉の文をして断簡残編の思あらしむこれ看官の最大遺憾作者の不本意此両失を以て雑誌の通弊とす弊店此に見るあり欧米に行はる、一号読切の「某氏文庫」の制に倣ひ広く諸大家の名作を乞ひ毎月一回新著百種なる雑誌を発刊す但小説専門にあらず時々政治工芸等の新著をも掲載す是右二失の通弊を去るのみならず又廉価の益あり三月五日を以て第一号を発刊す⁽⁴³⁾。

この宣伝文から見れば、「新著百種」は欧米の「一号読切」小説雑誌の形をまねた月刊誌である。しかも、廉価で幅広い読者層の支持を期待することができる。さらに、「『新著百種』と引き換えできる「切手」の売出しによって、まとめて注文が便利になって、地方読者の買いやすさにもつながっている⁽⁴⁴⁾」。「新著百種」シリーズは『二人比丘尼色懺悔』など「近代文学黎明期の傑作を多数世に送り出した」叢書である⁽⁴⁵⁾。

依田学海がこういう欧米型小説雑誌である「新著百種」に発表した「小野篁」は古文体でありながら、本稿で論じたように、内面描写や会話の添加により小説の側面を持つ。しかも、雑誌の性格からより広い読者層が意識され、娯楽性にも重点が置かれている。

ところが、森鷗外や忍月からみれば、学海の「小野篁」は「小話」か「奇話」で、小説とは言えなかった。依田学海のような漢文学者の中には、中国の「稗史小説」の型が既に定着していた。学海が書いた『経国美談』の序文の「余幼嗜和漢小説、讀數百部。然眼孔甚小、不能出尋常範圍外一步。頃稍涉外國事、目不識橫文、就譯讀之、猶隔靴搔癢、悶不可言。及閱此篇始知和漢小説外別開一生面矣⁽⁴⁶⁾」という記述からは、翻訳を通じて出会った西洋小説が別天地を開いてくれた喜びと同時に、時代遅れの身で読書する悔しい気持ちが見える。このような「新時代に対するコンプレックスをふくむ文人の心中の苦しみ⁽⁴⁷⁾」は、学海のような「旧派」文学者にとって、おそらく共通の悩みであったろう。井上弘は次のように指摘している。

勉強家の学海が新しい要素をふくむ西欧の歴史小説や翻訳小説などの著作に接し、ことにその著者から序文執筆の依頼を受けたりして少しずつ小説への認識や理解が拡大され、固陋を脱却して表面的には、それ以前とは少なからず変化をみせていたが、だからといって持ちまえの勸懲主義に基づく小説観についての根本的な見解ないし信念は変わることにはなかった。百八十度の転換は無理であった。⁽⁴⁸⁾

確かに、学海は「小野篁」の描写にうかがえるような進取的な姿を持ちながら、その基盤の素養に束縛され、不徹底にし、か時代に接続できない状況に陥っていた。「小野篁」について、単なる『聊齋志異』の翻訳であると森鷗外が指摘し、石橋忍月が「小説」ではなく、「奇話」と認識し、「一種の通俗竹取物語」と批評して、拜見居士は『聊齋志異』逸文ともなすべき談話』であると述べたのは、本作の近代的な要素が部分にとどまっているからであろう。

井上弘が提示しているように、⁽⁴⁹⁾幅広い人脈を持つ学海のまわりには、森鷗外、坪内逍遙、幸田露伴、矢野龍溪、二葉亭四迷ら「近代文学」の新しい「要素」を持つ人々が集まっていた。学海は彼らの著作のために、序文を書き、また批評もしている。学海が幸田露伴を文壇に送り出したことは文壇の佳話として広く知られている。さらに、『女学雑誌』、『国民之友』などの雑誌に積極的に寄稿して、小説・文学評論を書き継いでいった学海の創作は歴大である。このように、人脈の形成やから創作、批評活動まで日本文学の近代化に対する学海の貢献は大きい。

新世代の文学者と比べると、保守的で不徹底的ながらも、依田学海作品の芸術性、登場人物の内面描写など、「近代文学」の実現を目指して独自の努力をしていたことは認められてよいのではないか。そして、この作品は、日本古典文学の系統を継承しながら、近代的な要素を取り込んだ過渡期の作品として、文学史に位置づけられてよいと思う。

翻案の意義について論じる際に、吉武好孝の「翻案」という分野は、日本文学の近代化の過程においてもっとも大きな役割を果たしてきている⁽⁵⁰⁾という指摘がよく参照されている。これは西洋小説の翻案について言っているが、同じことは、漢文

小説の分野においても言えると考えたい。漢文の素養を活かした学海の中国古典の翻案は、反響を呼び、小金井きみ子のよ
うな若い世代の文学者に大いに影響を与えた⁽⁵¹⁾。しかも、直訳に基づき、擬古文の文体で自らの作風を組み込んでいく『聊齋
志異』の翻案作家として、明治時代において、学海は第一人者と言える⁽⁵²⁾。本稿の第四節で挙げた時代評からみる同時代にお
ける反響の大きさも学海の商品が多くの人たちに影響力を持つていた有力な証拠である。近代過渡期の日本文学を論じる際
に、西洋文学の影響は従来の研究でよく取り上げられるが、中国文学の翻案が影響を与えている意義も改めて認識されるべ
きであると思われる。ここでは、具体的な影響を与える前提として、学海の翻案小説の位置づけを試みた。

※本稿は国際シンポジウム「近代東アジアの思想と文化―中国・日本の文化交流の視点から」(二〇一五年十一月於中国・
嘉興学院)における口頭発表に基づくものである。発表に対して御教示を賜った方々、発表機会を与えてくださった方々に
謝意を表したい。

【注】

- (1) 鲁迅『中国小説史略』(中島長文訳 平凡社 一九九七年七月)。
- (2) 山口剛「支那小説史の輪郭」(『山口剛著作集 第六卷』中央公論社 一九七二年八月)。
- (3) 陳炳昆「『聊齋志異』と日本近世文学」(広島大学博士論文『日本文学と中国古典文学』第三章所収、一九九五年三月)。
- (4) 大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』関西大学東西学術研究所 一九六七年三月)。
- (5) 魚返善雄「稗史小説と明治小説」(『国文学 解釈と鑑賞』第一五巻第五号 一九五〇年五月)。
- (6) 徳田武「読本と清朝筆記小説―『今古奇談』『通俗排悶録』について」(『江戸漢学の世界』ぺりかん社 一九九〇年七月)。
- (7) 藤田祐賢「聊齋志異の側面―特に日本文学との関連において」(『慶応義塾創立百年記念論文集』一九五八年十一月)。
- (8) 前掲注三論文参照。
- (9) 藤田祐賢、八木章好は日本における『聊齋志異』の研究状況を『聊齋研究文献要覧』として、一九八五年にまとめている。それ以外に、

『聊齋志異』が日本の近代文学における影響の様相を述べたものとして、山田博光「聊齋志異と日本近代文学」（帝塚山学院大学創立二十五周年記念論集編集委員会編『世界と日本』帝塚山学院大学 一九九二年三月）、翁蘇倩卿「日本近代文壇に於ける『聊齋志異』の受容と変容」（国文学研究資料館編『国際日本文学研究会集会議録（第六回）』、一九八三年三月所収）などの論考がある。

(10) 「依田学海の文学活動」（井上弘『近代文学成立過程の研究』有朋堂 一九九五年一月）。

(11) 依田学海『学海日録』（学海日録研究会編『学海日録』第七卷 岩波書店 一九九〇年十一月）原文は「九月二日。（中略）吉岡哲太郎来て、余に新著を請ふ。近來、新著百種とて世に著はるるものにのせんとて也」とある。

(12) この日の日記で、学海は「小説小野篁なり」と述べていた。（学海日録研究会編『学海日録』第八卷 岩波書店 一九九一年一月）。

(13) 森鷗外「寄書」（『読売新聞』一八九〇年二月二十七日）。

(14) 森鷗外が改題して『小野篁』について論じたことは、梅山聡が東京大学鷗外文庫の『聊齋志異詳注』のために書いた解説部分で触れている。

(15) 森鷗外「小野篁に就きて」（『月草』春陽堂 一八九六年十二月）。

(16) 藤田祐賢「聊齋志異の一側面―特に日本文学との関連において」（『慶応義塾創立百年記念論文集』三田哲学会 一九五八年十一月）。

(17) 藤田祐賢「聊齋志異」在日本（追補與訂正）（『蒲松齡研究』第十八期 蒲松齡記念館 一九九五年十月）。

(18) 翁蘇倩卿「日本近代文壇に於ける『聊齋志異』の受容と変容」（国文学研究資料館編『国際日本文学研究会集会議録（第六回）』一九八三年三月所収）。

(19) 小田桐弘子「小金井きみ子と中国古典『聊齋志異』」（平川祐弘・平岡敏夫・竹盛天雄編『講座・森鷗外』第一卷 新曜社 一九九七年五月）。

(20) 無窮会に保存されている依田学海自筆の日記自体は句読点が付いていないものである。ここで引用している日記文は学海日録研究会編『学海日録』からのものである。ただし、「但雲湖」は道光二十二年（一八四二）『聊齋志異新評』の評者の号であるので、「但、雲湖」を「但雲湖」に直した。

(21) 『依田学海作品集』の「作品解説」（依田学海作品集刊行会 一九九四年一月）が提示しているように、「題名の小野篁は、平安前期の官人・学者・歌人で博學で詩文に長じ天才と言われていた。」という。嵯峨天皇小野篁の詩才を試みたことが文壇の美談として古くから伝流してきた。

斎藤淳は「嵯峨天皇小野篁の詩才を試みたまひし事の真偽」（『國學院雜誌』第一五卷五号 一九〇九年五月）において、その始末を次のようにまとめている。「文集（筆者注：白楽天の詩集）に因みたる、文壇の佳話も少なからざるが、殊に、嵯峨天皇の、河陽館に行幸ましくて、小野篁の詩才を試み給ひし事は、最も名高き話なり。（中略）今、その事実の出所を按ずるに、江談抄に、始めてこれを伝へたり。其の文次の如し。

閉閣唯聞朝暮鼓、登樓遙望往來船、故賢相傳云、白氏文集一本詩渡來在御所、尤被秘藏、人敢無見。此句在彼集、觀覽之後、即行幸此

観、有此御製也、召小野篁令見。即奏曰、以遙為空最美者。天皇大驚勅曰、此句樂天句也、試汝也、本空字也、今汝詩情與樂天同也者、文場故事、尤在此事、仍書之。

大日本史を始め、篁伝を作るもの、皆之れを引ききて、篁の文才の優なりを賞せり。

- (22) 雲篆という言葉について、中国清朝の厲荃が編集した『事物異名録・仙道・道書』には、「道家字、名雲篆、又曰雲書」という記録がある。

- (23) 八木章好は「蜂妖考」『聊齋志異』異類譚札記(二)(慶応義塾大学芸文学会『藝文研究』八六号 二〇〇四年六月)で、「『聊齋志異』の異類譚に顕著な特色の一つは、作品全体に執拗なまでに次々と配置される異類暗示の表現にある。「蓮花公主」においても、女が蜂妖であることを暗示する表現が随所に見られる。」といい、本文で触れた音楽のこと以外、「豊閣重樓、萬椽相接」のところで、往來する宮人や女官や、「洞房」などのところも異類暗示の表現とされている。

- (24) 中国の古典には、眉を新月と繋がつて詠じる作品がたくさんある。学海のこの句は唐の王涯の「秋思贈遠」にある「不見郷書伝雁足、唯看新月吐蛾眉」の後半と同じ趣向をしていると思われる。

- (25) 古代の中国において、妻のために眉を描くことは妻を愛する表現としてよく文学作品で取り上げられる。『漢書・張敞伝』には、張敞が妻のために眉を描くという記述がある。それ以降、「張敞画眉」は夫婦の仲睦まじさを述べる際の典故となった。

- (26) 中国漢の班固が著した『漢武故事』によれば、漢武帝が、阿嬌を見始めた時、「もし阿嬌を得ばまさに金屋を以てこれを貯うべし」といった。これは「金屋の阿嬌」という典故の由来である。唐の李白も「妾薄命」で、「漢帝寵阿嬌、貯之黄金屋」と詠じていた。この「金屋」は大きな家の喩えとしてよく使われ、「阿嬌」はもともと漢武帝の伯母の娘であるが、麗しい女性の呼称としても使われている。

- (27) 石橋忍月(匿名子)「新著百種第八号芳李」(『国民之友』「新聞雑誌」一八九〇年三月三日)。

- (28) 藤田祐賢「聊齋志異」在日本(追補與訂正)』(『蒲松齡研究』第十八期 蒲松齡記念館 一九九五年十月)。

- (29) ここでの、原作の面白さを生かそうとする意識は森鷗外が『読売新聞』で指摘した趣向の一致にも関わっている。

- (30) 石橋忍月(匿名子)「小野篁」(『国民之友』「新聞雑誌」一八九〇年三月三日)。

- (31) 拜見居士「新著百種第八号評」(『読売新聞』一八九〇年三月一日)。

- (32) 中村幸彦「翻訳・注釈・翻案」(水田紀久・頼惟勤編『中国文化叢書9日本漢学』大修館書店 一九六八年二月)。

- (33) 坪内逍遙『小説神髓』(松月堂、一八八五年九月〜一八八六年四月)。

- (34) 森鷗外「重印蔭艸序」(『かげ草』春陽堂 一九一一年九月)。

- (35) 森鷗外だけでなく、『読売新聞』で拜見居士も「小野篁」について批評し、「皮一重」とともに、『聊齋志異』を受容したものと指摘している。原文は次の通りである。

「我評素より豪然として評と云ふにたらず唯幾回か読了りて後何とか彼とか彼とか思ひ寄る節と記すのみ―極めて正直に云へば作者に動かされて我筆もつ手の動き其書に感ぜしめられて我心に感ずる節と書きあらはすのみ(中略)

- 学海先生の小野篁流石に我等の評と為す能はざるほどスキの無きもの文章自在敬服々々但し聊齋志異逸文ともなすべき談話是も近來珍らしく小金井女史の皮一重と共に読み去りてアツと云はせらるるものなり此次は槐安国の話し其次は蟻の熊野道中記などと簇々類似者が出来ては驚くなれど蓋し此篇は単に先生一流文字の巧と示されたるのみ読むもの亦単に先生の文章と見るべきのみ（拜見居士「新著百種第八号評」〔『読売新聞』一八九〇年三月一日 別刷 二ページ〕）
- (36) 石橋忍月（匿名子）「小野篁」（『国民之友』「新聞雜誌」一八九〇年三月三日）。
- (37) 石橋忍月「報知異聞」（『国民之友』一八九〇年四月三日）。
- (38) 石橋忍月「報知異聞」（『国民之友』一八九〇年四月三日）。
- (39) 前掲注二十七評論参照。
- (40) 班固は、『漢書』（班固撰顔師古注 中華書局 一九六二年六月）に、小説について、「小説家者流、蓋出於稗官。街談巷語、道聽塗説者之所造也」と述べ、小説を委巷常談や、道聽塗説などと認識していた。
- (41) 宗像和重「小説」をノベルに（坪内逍遙『小説神髓』（解説）岩波書店 二〇一〇年六月）。
- (42) ほかに、女学雜誌で大活躍していた雲峯子も「新著百種第八号」を題にして、「小野篁」を激賞した。原文は次の通りである。
 是は僅か二十頁の短篇にして一種の偶意小説なり只夫れ偶意小説なるが故に余は之を説かず蓋し偶意あるもの若くは諷刺の意を含む文字は讀者各之を味ひ之を解了すべきものなればなりされば余は其意の存する所は措て云はず只文章の點に於て余が感服する事を述ぶるを以て足れりとなす夙に人の知る如く本篇の作者学海先生は新井白石の著書及び春臺雜誌の如き文章を好ませられ兼而漢學に博く渡らせらる、丈けありてさすがに文章流暢平易讀者をして轉た其短篇なるを惜ましむ實に余輩後進者の學ぶべき文章なりとす余輩淺學先生の著作に向つて是非を判するの力なし故に只一言して止んのみ。（雲峯子「新著百種第八号」〔『女学雜誌』第二〇三号 一八九〇年三月八日〕）
- (43) 『東京日日新聞』一八八九年二月二十三日による。
- (44) 『娛樂として人氣があつた文芸書の販売目録（吉岡書籍店）』（二〇一一年十月二十四日〜十二月二十四日 千代田図書館企画展示資料）。
- (45) 前掲注四十四参照。
- (46) 依田学海「序文」（『齊武名士 経国美談』（後編）報知新聞社 一八八四年二月）。
- (47) 前掲注十引用書七六頁参照。
- (48) 前掲注十引用書八十一頁参照。
- (49) 前掲注十引用書の「評論活動―保守的な姿勢を持して」の一節参照。
- (50) 吉武好孝氏『近代文学の中の西欧―近代日本翻案史』（教育出版センター 一九七四年十一月）。
- (51) しかも、忍月は小金井きみ子の「皮一重」を次のように激賞していた。
 皮一重は超然時俗に頭角を出して頗る健筆の意想あるなり、想を貴ぶの弊、終に實を失れたりと雖も素と是れ小説にあらずして奇話なれば強ち咎むべきにあらず、奇話は多く小兒の翫味に供すべきものにして成人をして真面目に読ましむるは頗る難し、只夫の皮一重は寧

る成人をして咀嚼せしむるに充分の價值あり、是れ吾人が皮一重を以って凡作に非ずとなす所以なり。「今の言文一致といふものには賤しきふしも少なからず、さればとて古文のまゝを今さらに作出んもねがはず活語にてをはの法をたゞして今の言葉をも用ひほどよき物か、ばやと思ひ侍る」是れ女史が文牀に就ての意見なり、吾人は是に於て乎始めて知る、女史が總ての譯文詞健にして熟美なる所以の偶然にあらざるを。(石橋忍月「啄木鳥」「閨秀小説家の答を読む」〔「国民之友」一八九〇年四月十三日〕)

(52) 小田桐弘子は「小金井きみ子と中国古典『聊齋志異』」で、明治期『聊齋志異』の翻訳のはじめを明治二三年公表された小金井きみ子の「皮一重」と認識したが、藤田祐賢が「『聊齋志異』在日本(追補與訂正)」(本論にも言及あり、注二十四参照)で、明治期の『聊齋志異』の最初の訳本を明治二〇年に出版された神田民衛の『艶情異史』と特定し、きみ子の「皮一重」は翻案と改めて認識している。また、藤田祐賢は「聊齋志異の一側面―特に日本文学との関連において」(『慶応義塾創立百年記念論文集』一九五八年十一月)で、擬古文で『聊齋志異』を翻訳したもう一人の人物である蒲原有明を取り上げている。蒲原有明の訳作は原作の簡潔さをできるだけ生かそうとする意識がうかがえる。

【資料】

(1) 膠州寶旭 字曉暉 方晝寢 見一褐衣人立榻前

小野篁の英才は。世の知る所なり。

A 此人いまた官道に進まざりし頃。或日己か家に在り。書讀めたりしに。B 折しも秋の半にて。紅葉の庭に散りたるも。流石に見ところ無にあらざ。

折に合ひたる樂天の詩など打誦めたりしに。夕夜深くるまで。書讀みし疲にや。健また重くと眠たかりければ。思はず凡に憑りて。まろろみし夢のうちに。褐色の狩衣着たる人我前に在り。

その色をみるに惶れおのゝくか如く。何やらん物言たげにみゆるにぞ。C お事はいかなる人におはすと問へは。

彼人謹て答ふるやう。

某か主にて候君の。御身に對面せま欲しとて。待居玉へり。参り玉はんやといふ。

D 篁もとより奇を好めは異議なくその言に従ひて。つきゆくほとに。我家の牆を繞りて。幾町かを過くると E 見るほとに。常には見えぬ大厦高樓あり。

(2) 逡巡惶顧 似欲有言 生問之

答云

相公奉屈 (3) 相公何人 曰 近在鄰境

從之而出 轉過牆屋 導至一處 疊閣重樓 萬椽相接

曲折而行覺萬戸千門迴非人世

(4) 又見宮人女官往來甚夥

都向褐衣人問曰

寶郎來乎

褐衣人諾

俄 一貴官出 迎見甚恭

既登堂 生啓問曰

素既不敘 遂疏參謁 過蒙愛接 頗注疑念

貴官曰

寡君以先生清族世德 傾風結幕 深願思晤焉

(5) 生益駭 問 王何人

答云 少間自悉 無何 二女官至

(6) 以雙旌導生行

此方へゆき彼方へゆく。路の曲折限りなく。萬戸千門立ち續き。F 此世のうちそとは覚えぬはかりなりき。

又そのうちに。往來しぬる人を見るに。衣冠正しくしたるものあり。G 何とも得しらぬいと麗はしき衣装を着たるものあり。

篁の来るをみて。褐色の狩衣きたる人に向かひ。小野のぬしを。ともなひ来るかと問ふに。いかにも。御共して参りたりと答ふ。

斯く問ふもの引きもきらず。篁こはいつこにか来りて。又いかなるゆゑに。我來るを知りたるにやと思へとも。狩衣きたる人は唯道を急くのみ物問ふ可くもあらされは。引かるゝまゝに。一の大なる家に着きぬ。

斯て篁はこの館に入るに。衣冠したる貴人恭しく出迎えて。出居の間と覺しき所に登る。麗しくさうぞきたる人。あまた出て来て。これをもてなす。

篁最怪しく。素より面識りにも侍らぬものがいかにして斯く厚くものせらるゝやらん。その故よしを知らし玉へといふに。

衣冠したる人謹て。吾君王の御身の名族にして才高きを職り。常に景慕し玉ひしか。けふなん對面しても申さんとて。斯くは招き玉ひしなりと答へしかは

篁ますゝ恠み。H 君王としもの玉ふは。いかなる君に在します。吾大君の外には。さる人あらしと思ひしに。

否しはし待給は、自から知り給ふべしといふはしに。忽ち二人の女官あり。

I 五衣に緋袴着たるが。檜扇をかざして奥のかたより出て、來つ。いさこなたへとありければ。

入重門

(7) 見殿上一王者 見生人 降階而迎 執賓主禮 禮已
踐席

(8) 列筵豐盛

(9) 仰視殿上一扁曰桂府 生踟蹰不能致辭

王曰
忝近芳鄰 緣既至深 便當暢飲 勿
致疑畏 生唯唯

(10) 酒數行 笙歌作於下 鉦鼓不鳴 音聲幽細

稍間 王忽左右顧曰 朕一言 煩卿等屬對

篁は何とも得しらねども。いなむ可くも非れはまた引かるゝまゝに従ひゆくに。最大なる門二ツはかり過ぎて。見上るばかりの厳しき宮殿に至りつきぬ。

とみれは君王なるへし。J 龍鳳の袍を召して。珠玉の冠を戴きたるが。篁の入り來るとみて。早く御高座を降りて。階下に出て迎へ。手を執りて階上に登り。賓客の席に就かしめ。

K 貴客よくこそ問はせ給ひたれ。かねて才學聲望は世に隠れ無きをもて寡人窃に景慕に堪へず。斯る陋境なれば。もてなし奉る者なければ。聊一杯の水酒を召され候へど。左右に目くばせし給ひしかは。近臣等は心を得て。はやくも手にく水陸の珍羞を置き列へ。金銀の器をもてこれをすゝむ。篁驚きあきるれども。すゝむるまにく。これを飲み食ふしその味えも言はれず。

M しはらくし首を擧て殿上の扁額をみるに。雲篆をもて。桂府の二字を記したり。その意を知らねども。人間世界に斯る處在としも聞かされは。大いに恠み訝りしを。

王はさこそとこれを慰め。貴客必ず恠み給ひそ客人の家は。もとより貴客の館と遠きにあらず。因縁無きにあらされは。必ず疑ひ畏ふこと。無と慙慙に仰せしかは。篁は僅かに心を安くしつ。

御盃を賜はる程に。酒數行に及ひし時。笙歌の音いと面白く堂下に起れり。されどもその音幽かにして。絲の如く。N 唯絲竹の響のみにして。鉦鼓の音を交ゆること無し

O こは珍しき音楽なるかな。と思とも。問ひ奉らんもさすかにて。暫く耳を傾けて聴居たり。

王は左右を顧みて。寡人こゝに一句の語あり。この對句を作るものあるへしやと。仰せけるに。

才人登桂府 四座方思 生即應雲 君子愛蓮花

生即應雲 君子愛蓮花

王大悅 曰

奇哉 蓮花乃公主小字 何適合如此 寧非夙分 傳語公

主 不可不出一晤君子

(11) 移時 珮環聲近 蘭麝香濃 則公 主至矣

(12) 年十六七 妙好無雙

王命向生展拜 曰

此即蓮花小女也

拜已而去

生睹之 神情動搖 木作凝思

そは如何なる語にて候と。伺申せは。王は徐に才人登桂府といへる句にてそとありしに。左右の近臣等いかに思へとも。善き對を得ず。

篁これをみて。思を凝らすにも及はず。君子愛蓮花とこそつけたりけれ。

王これを御覽して喜玉ふこと斜めならず。こは不思議なる名句かな。蓮花とは。すなはち吾女の幼名にこそあれ。秀才が不用意につけられたるは。夙縁ありと覺えたり。早く我女を呼出し。君子に對面させよ。と仰せありしかは。左右の近臣は。あと應へて。奥の方に進み入りしか。

須臾ありて。珮環の聲近く聞こえ。蘭麝の香濃やかにわたりて。一人の姫君出て來れり。

篁思はず眼を斜にしてこれをみるに。年は二八餘りなるへし。髮艶かにして色白く。P 眉の韻は新月の雲間を出るに異ならず。唇の紅は。初花の春風に開くに似たり。麗はしくして婀娜ならず。温しくして品尚し。

王はこれに命して。篁を拜せしめて仰せけるは。

此はこれ寡人が少女にして。その名を蓮花と申すなり。いかに見識りおかせ給へと。ありしかは。

篁はいそかはしく。身を起して。禮を返すに姫君も。にこやかに。禮を施し。やかて奥にぞ退きける。

篁は跡を見送りて。茫然として魂を失ひしことく。坐せるまゝに動きもやらず。直すら思を凝らすのみ。

王舉觴勸飲 目竟罔睹 王似微察其意 乃曰 息女宜
 相匹敵 但自慚不類 如何 生悵然若癡 即又不聞
 近坐者躡之曰 王揖君未見 王言君未聞耶 生茫乎若
 失 懣懣自慚 離席曰 臣蒙優渥 不覺過醉 儀節失
 次 幸能垂宥 然日旰君動 即告出也 王起曰 即見
 君子 實愜心好 何倉卒而使言離也 卿即不住 亦無
 敢於強 若煩縈念 更當再邀 遂命內官導之出 途中
 內官語生曰 適王謂可匹敵 似欲附為婚姻 何默不一
 言 生頓足而悔 步步追恨 遂已至家 忽然醒寤 則
 返照已殘

冥坐觀想 歷歷在目

晚齋滅燭 冀舊夢可以復尋 而邯鄲路渺 悔歎而已

王は盃を舉てこれを勸むれとも。篁これを見もかへらす。王はやうやくその心を
 悟り。寡人か女容卑しけれとも。いがて君子の配偶と為さま欲し此事いかにある
 可からんと仰しかと。篁なほも悵然として痴人のことく。き、入る、こと無しし
 かは。近臣はこれを傍痛く思ひしにぞ。主君の仰することあるを。御身は何とか
 聞かせ給へるとしは、言はれて。篁はやうやくにして我に復り。あたりを顧み。
 恥畏れ。慌て起上り席を離れ。微臣厚き待遇を蒙り。思はず酔を發し。痛く無禮
 を致したり。久しく御宴に侍りしかははや日も旰たり。

暇を給はるへうもやと啓しければ。王打笑み。秀才何とて然は急ぎ給へる。今暫
 くこゝに在して物語を聞かし給へ。然りなから久しく留らしとあるを。強てとい
 はんも興無かるへし。またよき折もあらは再び迎へ申へしとて。近臣に仰せて。
 篁を送らせらる。篁すなはち近臣の後つきて。もとの路にかへり出るに。近臣篁
 に打向ひ。御身はさきに。王の宣ひし事あるをき、給ひしかといふに。篁否何と
 も承る事なかりし。そはいと惜しき事にておはしけり。王は君の才を愛し給ふの
 餘にや。姫君を君に賜はせんとの仰ありきと。き、て篁遺感に堪へず。心のうち
 に。かの姫君の御姿に見惚しかは。身は其坐に在りなから。も脱けの壳の心地し
 て。王の仰をきかさりしこそ口惜しけれ。

いかにすへきと悔い怨みしか。はやくも家にかへり來て。坐につきしと思ひしに。
 忽ち夢は醒てけり。

Q 夕日の影は庭の木の間に漏れて紅の光をと、め寒鴉の聲は落葉の音にまじりて
 林のあなたに聞ゆ

篁はつく／＼と夢のうちに有しことを思ふに。只眼のあたりに見ゆる心地して。
 その面影の忘れやらす。再び夢みる事もやと。夜に入りしかは。常にもあらで早
 く打臥し。燭を滅し枕をとり。眠らんとすれとも。あやにくに。またかの姫君の
 面影の眼に遮るのみ。いも寝られず。その夜を墓なく明かすものから。心鬱々と
 して娛まず思はず。幾日を過にけり

(13) 一夕 與友人共榻

忽見前内官來

傳王命相召

生喜 從去 見王伏謁

王曳起 延止隅坐 曰

別來知勞思眷 謬以小女子奉裳衣 想不過嫌也 生即
拜謝

王命學士大臣 陪侍宴飲

酒闌 宮人前曰公主妝竟 俄見數十宮女 擁公主出

以紅錦覆首 凌波微步 挽上氍毹 與生交拜成禮 已
而送歸館舍 洞房溫情 (14) 窮極芳賦

或る日 R 親しき學生來りしかは昔今の物語に小夜深けて今夜はこゝにと。かの學生を家にとめ。枕を並へて臥したりしに。

忽ち前の夜我を導ひきし官人枕邊に至り。秀才はやく眼を覺し給へ。吾君の御召あり。いささせ給へと促すにぞ。

篁は夢心地に。大に喜び。その後に従ひ行に前の日至りし路と異ならず。やかて王に拜謁す。

王は篁の來るを見てその待遇先の日にまして最懇なり。はやく堂上に錦の茵をしかして坐を賜ひ。

さて仰するやう。前の日小女を君子に嫁せむと請申しに。その事いまた諧はずして。別れしかは。今復光臨を促せしに。幸にして棄てられず。速に訪はれしは。この婚姻をゆるされしと覺えたり。寡人の喜び何事かこれに若ん。とて宣旨降りて。

大臣を召され。その事を仰せらる。大臣數多衣冠正しくして參内し。篁を拝しその才貌を稱賛して。大禮を行ふに。

はやくも宮人等奏聞すらく。姫君御裝束なりぬとて。綺麗やかに装ひたる官女幾十人。前に立ち後ろに従ひ。姫君を導きて出來る。

姫君は紅の錦をもて。首を覆ひ凌波の歩ゆるやかに。設の席に就き給ひ。篁と婚姻の儀を終りしかは。大臣等は王の仰を承り。篁に館を賜はり。姫君の腰入の慶を果たしけり。

S 然る程に篁は思も懸けず。國王の婿となるのみか。世にも稀なる美人を娶りて。その喜は大方ならず。洞房暖かに芳ばしく。世は秋なから春霞。引わたしたる天上の娛樂も。此上あらしと思ひたる。

生曰
有卿在目 真使人樂而忘死 但恐今日之遭 乃是夢耳

公主掩口曰
明明妾與君 那得是夢

(15) 詰旦方起 戲為公主勻鉛黃

已而以帶圍腰 布指度足

(16) 公主笑問君顛耶

曰

臣屢為夢誤 故細志之 倘是夢時 亦足動懸想耳

調笑未已 一宮女馳入曰

妖入宮門 王避偏殿 凶禍不遠矣

篁は姫君に向かひて言やう。御身を見參らせてより。此世の中に憂きといふことを忘れたり。然れども我は今宵の事を。夢にあらすやと疑ふのみと。

最危ふけに見えけるに。姫君はほゝと打笑み。妾と御身とこゝに在り。この燈の光をみ給へ。この夜の被を見給へいかて此をしも夢といふへきと。打戯てその夜は嫺しく明しけり。

秋の夜の長きも。今宵はかりは明けやすき心地して。聞もる朝日の光に驚かされ。篁ははや起出るに。姫は疾く起て T 御髮あげ給ひ。化粧ものし給ふに。古人は自ら己か妻の眉を描くと聞く。

そを學ひなんも興あるへしなと戯聞えて。篁はその所を去り敢へす衣召しかへ給ふをみて。帯を御腰に結び御足を指して長し短しを度るに。

姫君はいとおかしとみ給ひて。U 御身は何の戯をし給ふといふかれは。

篁はほゝ笑みて。某しはく夢のうちに。思ひ誤る事多ければ。斯くして夢か夢ならぬかを。試み侍るのみといひしにそ姫君は笑みくつかへりておはしき。

斯るところに。館のうちに俄かに騒かしく。宮女一兩人髮も亂れ衣もいとしとけなく。走り來り。

汗もしとゝに倒るゝか如く。御簾の前に跪き。事ありくゝと叫ひしかは。篁も姫君も大に驚き。こは何事そと尋ね給ふに。かの宮女は息つきあへす。

何物にやらん。最畏ろしき妖魔の。この宮殿を指して押寄せ來り。君王はこれを避けて別殿にのかれ給へり。はやく參内ありて。危急を救はせ給へと申ければ。篁驚きいへはさらなり。

姫君は魂も消るはかりに怯ちさせ給へとも。唯篁を力にて。腰輿にさへ召し敢へす。歩跣にて別殿におもむきぬ。

生大驚 趨見王

王執手泣曰 君子不棄 方圖永好 詎期孽降自天 國祚將覆 且復奈何 生驚問何說 王以案上二章授生 啓讀 章云

含香殿大學士黑翼 為非常妖異 祈早遷都 以存國脈 事 據黃門報稱 自五月初六日 來一千丈巨蟒 盤踞宮外 吞食內外臣民一萬三千八百餘口 所過宮殿盡成丘墟 等因 臣奮勇前窺 確見妖蟒 頭如山岳 目等江海 昂首則殿閣齊吞 伸腰則樓垣盡覆 眞千古未見之凶 萬代不遭之禍 社稷宗廟 危在旦夕 乞皇上早率宮眷 速遷樂土 云云

生覽畢 面如土灰

即有宮人奔奏 妖物至矣

闔殿哀呼 慘無天日

王倉遽不知所為 但泣願曰

小女已累先生

生窒息而返 公主方與左右抱首哀鳴 見生入 牽衿曰 郎焉置妾

生愴惻欲絕 乃捉腕思曰 小生貧賤 (17) 慚無金屋 有茅廬三數間 姑同鼠匿可乎

斯て篋は君王に拜謁し。様子いかにと問申せば。

君王は大息つき。秀才寡人を棄すして。永き好を結はれしに。思はさりき。この撃の天より降らんとは。とて龍案のうへに置れたる上表一紙を指し示されたり。篋いそぎ取りてこれを見るに。その文にいへらく。

含香殿大學士臣黑翼言す非常の天變の為に。はやく都を遷しもて。國脈を存せんとする事。右は黃門官の報をみるに。去る月の初より。一千丈の巨蛇ありて。宮の外に盤居し。内外の臣民を吞食し。一萬三千八百餘口と過る所の宮殿。皆ことくく邱墟となるといへり。臣勇を奮ふて前み窺ふにこの妖蟒の頭は山岳の如く。目は江海に等し。首をあぐれば殿閣も齊く吞み。腰を伸せば樓垣も盡く覆へる。千古のいまた見ざる所の凶變にして。萬代にも遭はざる事の災難なり。社稷宗廟の危きこと旦夕に逼れり。乞ふ皇上はやく宮眷を率ゐ。速に樂土に遷らせ給はんことを祈奉るとあり。

篋はこれを見て。驚き慌れ。面地土の如く。こはいかにといふほとこそあれ。

宮人走り來て奏すらく。妖魔すてに至りぬ。御用心あるへしといふにぞ。

宮中大に騒ぎ立ち。泣き叫ぶ聲おひたし。天さへ曇りて日の光も見へ分かす。

王はすてに如何ともす可らざるを知らせ給ひけん。御心を定め。少女はすてに君に任せたり。いかにもして。この災を逃れさせ給へとありしかは。

篋は畏まりぬといひも果てず。姫君を掻き抱きて。もとの館に馳かへるに姫君は篋の袖に縋り。こはいか様にせん。いかにせんと。泣まといひ給ふほとに。

篋は慰めて。某身賤しければ。御身を穩し給ふへき家とて無けれども。草の庵も時にとりての玉樓大廈。しはらくおはします。もよかりなんと聞ゆれば。

公主含涕曰
急何能擇 乞攜速往 生乃挽扶而出 未幾 至家

公主曰

此大安宅 勝故國多矣 然妾從君來 父母何依 請別
築一舍 當舉國相從

生難之

公主號咷曰

不能急人之急 安用郎也 生略慰解
即已入室 公主伏床悲啼 不可勸止 焦思無術 頓然
而醒 始知夢也

而耳畔啼聲 嚶嚶未絕 審聽之 殊非人聲 乃蜂子二
三頭 飛鳴枕上

大叫怪事 友人詰之 乃以夢告 友人亦詫為異 共起
視蜂

姫君は喜びて。斯る危急の時に臨みて。いかて家の良あしを撲み侍らん。御身のおはす所こそ。いかなる月の都とも見るへきにこそとて篁に導ひかれて。家に至り着き。

けふ書讀みさしたる窓のほとりにゆきを見るに。いつのほとにか友なる學生はかへりにけん。人もなければ次よしと思ひつゝ、姫君をこゝに居へ。

まゐらするに姫君はやうやうに息出給ふ心地して。あたりを見まはし。かゝる御住居のおはすに。何とて告給はさりけん。さるにても。我父母はいかに在ることや。いと心もとなし。此あたりに家作りて。父母を迎へ奉り。宮のうちの人々をも。住ませはやとありければ。

篁は驚き。かゝる所にいかて多く人を住せ奉るへき。思もよらぬ事を仰つるものかなと答ふるに。

姫君は打泣きて。

危をみて救はせ給はさる程の。御心つよき人に此身を打まかしつる事の悔しさよ。さらはいなんと。

立んとし給ひしかは。篁あわて御袖をひかへ宿世ありて斯る縁を結ひつるものを。生るも死ぬるも。唯一所とこそ思ひ奉れ。いかてゆるし申さてやはあるへき。されとつれなく仰つるものを。去なん去なさしと。すまふほとに。忽然として夢は醒てけり。

去りしと思ひし學生は。吾側に眠りて居り。殘燈影くらくして曉の鐘の聲すなり。

忽ち耳のほとりに。微に鳴くものありこれをみるに。人の音にあらで。あないぶかし小さき蜂の子の鳴くにてありける。

篁はいそぎ起出で。昨夜の夢の事を學生に告ぐるに。學生も驚きて。恠しき事に思ひつゝ。あたりをみるに。

依衣裳袂間 拂之不去 友人勸為營巢 生如所請 督
工構造 方豎兩堵 而羣蜂自牆外來 絡繹如織 頂尖
未合 飛集盈斗

跡所由來 則鄰翁之舊圃也 圃中蜂一房 三十餘年矣
生息頗繁

或以生事告翁 翁覘之 蜂戶寂然

(18)發其壁 則蛇據其中 長丈許 捉而殺之 乃知巨蟒
即此物也 蜂入生家 滋息更盛

蜂の子は。衣の装すそにまつはりて。猶去りあえぬさまなれば。學生は憐みて篋
にすゝめ。その巢を造らしめけるに。その巢はいまた作り終わらざるに。はやく
も多く。蜂あり。牆の外より群かり來りて。みなその巢のうちにぞ。入りにけ
る。

篋は學生と件の蜂はいつこよりか。斯くは群りよるにやと。尋ねもとむるに篋か
家の隣なる。賤の翁かすめる圃にそありける。此圃のうちに蜂の巢作りて棲むこ
と三十餘年にして。子を生むこと極めて多かりしとぞ。

翁は他よりして篋か事をき、しかは。窃かにゆきてその巢をみるに。きのふまで
數多棲みたる蜂は。た、一疋も居らすなりにき。

こは如何なるゆえそと。訝りて。その巢作りし藁屋の壁を毀ちて。これを見しに。
長さV八尺あまりの蛇。その壁のうちにありしかは。これを打殺して捨にけり。
げにくかの姫君の御腰の細かりしも。またかの音樂のいと微かなりしも。

